

中川善史

八幡太郎よしあし風雲録
ダダチヤ国を救えの巻

日 本 国
前 巻



JAPAN

「だだちゃー！」

「マメー！」

「だだちゃー！」

「マメー！」

その日、よしあしの城は陽気な声に包まれていた。南洋の国「ダダチャ王国」の王子が友好使節としてよしあしの城を訪れていたのである。

一人が手を高々と上げて

「だだちゃー！」

というと、相手もそれに答えて手を挙げ、

「マメー！」と返事をする。これが、ダダチャ王国の親愛の情を示す挨拶であった。

王子を主賓とした晩餐会の席である。

テーブルの上には、峠の釜飯、富山の鱒寿司、森駅のいかめし、新幹線の鰻弁当、トンカツ弁当など山海の珍味がずらりと並んでいる。

「異国の客人が訪ねてくるとは、わしも大物になっ



たものよのう」

と、満足げにうなづくよしあし。

「駅ビルで全国駅弁祭りをやっていてようございました」

と、接待の苦勞を物語る家老。

さんざん、駅弁を食いまくって腹一杯になった一同は、別室に移ってよしあしの腰元舞踊団の踊りを見ながら南蛮渡来のブランデーなぞをちびちびと舐めている。

ふと、よしあしの隣にいた王子が声を低くして、

「よしあし様、近いうちにわが国にお出でいただけませんか」

「おう、海外旅行ですな。大名は数々あれど、海外旅行をしたものはおるまい。わしのステータスが上がるな。これは、天下統一に一步近づくといいものじゃ」

「お受けいただくとは、ありがたい。実は、わが国には困ったことが起こりましてな。ぜひとも、よしあし殿のお力を借りたいのです」

「ふふふ、わしの助けを必要となさるか。よいよい。これは、わしが日本一の大名と認められているようなものじゃな。この八幡太郎よしあし、いくらでもダダチャ王国をお助けいたしますぞ」

「か、かたじけない」

「ただだちゃ！」

「マメー！」

「だだちゃー！」

「マメー！」

日を期して、ダダチャ王国の外務大臣がよしあし一行を迎えにくることとなった。さあ、そうになると、こちらでは海外遠征の準備を整えなければならぬ。

「家老、わしの力を借りたいということは、軍勢を連れて行かねばならぬだろうな」

「なかなか大変ですな」

「ダダチャ王国へは、どうやって行けばいいのだろう」

「それがですな・・・」

と、家老は積み上げてある本を取っ替え引っかえ、あちこちのページを開けながら、「色々とガイドブックを買ってみましたのですが、出ていないのです。南洋というので、『地球の歩き方 東南アジア編』などを買ってきたのですが」

「南洋というからには、海を越えていくのだろうな。軍勢を連れて行くとなると、余程の大船が必要だが、我が領地にはそんな船を泊まらせる港などないぞ」



すると、

「お恐れながら」

と、一人の家臣がやって来た。

「なんじゃ」

「お恐れながら、拙者、以前海外旅行をした経験がございます」

「なんと得難き人材じゃ」

とよしあしと家老は、喜んで顔を見合わせた。

「して、その方は、どこへ行ったのじゃな？」

「ハワイにございます」

「は、ハワイとな」

「団体旅行にてございますが」

「団体旅行か。それは重畳じゃ。わしらも団体旅行になろうからな。それでは、どのような軍装で行けばよいのか、申し聞かせよ」

さっそく家臣のコーチにより、よしあし軍はスーツケースに、アロハシャツ、麦わら帽、



サンダラスなどの軍備を整えた。さらに、スーツケースにはマカデミアナツツの箱を一ダースほど入れるなど、周到な準備がなされた。

「いよいよ、当日がやってきた。」

総勢一万。全員アロハシャツに身を固め、

「えいえいおー！」

と氣勢を上げて、ダダチャ国からの迎えが来るのを待っていると、サンダル履きの見るからにチャラそうな青年がふらふらと歩いてきて、

「あの一、ここ、よしあしさんちつすか？ おれ、今日迎えに来たんすけど」

「すると、貴殿がダダチャ王国の外務大臣でいらつしやいますか」

「外務大臣？ ま、そんなもんすね」

よしあしと家老、小声で、

「外務大臣にしては随分軽そうな若造だのう」

「まあ、これが南洋の国の風俗かもしれませんな」

青年は、一万に及ぶアロハシャツの軍勢を見て、

「え、え、こんなに来るんすか？ それは無理つすよ」

「だが、王子はわしらの力を借りたいとおっしゃったぞ」

「いやー、なんか知らないっすけど、今日んところは、せいぜい殿様と家老さんくらいっすね。」

「なに、ふたり？」

再び、よしあしと家老、小声で、

「家老、これはどういことじゃな」

「今回は外交使節という名目で、ダダチャ王国の戦況を見定めてくるということでしょうか」

「そうか。確かに、様子がわからなければ作戦も立てられぬな」

そこで、家老は、待っていた一万のアロハシャツの軍勢に、

「今回は、殿とわしで行ってくる。お主らの遠征は延期！ただちに軍装を解いて通常の任務に戻ることに！」

「えー！」

と軍勢から不満の声が上がる。

「楽しみにしてたのに！」



「新しいカメラ買ったのに！」

家老は制して言った。

「文句を言うんじゃない！ おみやげ買ってきてあげるから！」

てくてく歩いていく外務大臣の後から、よしあしと家老は付いていく。

「大臣閣下、ダダチャ国へはどのように行くのですかな」

「こっちつすよ」

「こっちは、駅の方だが」

「そうつすよ」

駅について、青年はポケットから小銭を出して三人分の切符を買った。

また、よしあしと家老は小声で、

「船で行くのではなかったか」

「おそらくは、大船の泊まっている港町まで行って、そこから乗船するのでしょうか」

「それにしても、外交使節団なのに車くらい用意したっていいじゃないか。電車で行くのか」

電車は郊外の住宅地を呑気そうに走っていく。よしあしが久しぶりに乗る電車の単調

なりズムに揺られてうとうとし始めた頃、

「次の停車駅は、なんようく、なんようでございます」

という車内放送の声が入った。

「あ、次、降ります」

ゲームに熱中していた青年が顔を上げて言った。

ホームに降りると、「なんよう・南洋」という表示板が目に入った。

「なんと。南洋というのは駅の名前だったか」

「ま、鈍行しか止まらない駅だから、地元の人間しか知らないっすけどね」

駅前には商店街が続いていた。

「こんな所にダダチャ王国があるのか」

「もうすぐつす」

「ここつす」

と、青年がポケットに手をつ突っ込んだまま顎で指し示したのは、不動産屋とクリーニング屋に挟まれた、



「中華・ダダチャ王国」

という看板を掲げた店であった。

「な、なんと」

「ダダチャ王国とは中華料理屋であったか」

青年はドアを開けて、

「ただいま、連れてきたつすよ」

と奥へ声を掛ける。すると、セーターにエプロン、

頭には白い布を姉さんかぶりにした小太りのおばさんが走り出てきて、

「あ、外務大臣、いいところに帰ってきたわ。三丁目の山田さんにカタ焼きそばとチャーシュー麺、出前よろしくね」

と慌ただしげに言った。

青年がういっす、と返事をし、白衣を羽織って自

転車に乗って出掛けていくと、おばさんは、

「あら、よしあし様？ すみませんねえ、お呼びだてしちやって。さ、入ってくださいよ」



「率爾ながら、どなたですか」

「あら、すみませんねえ。あたし、ダダチャ王国の王妃なんですよ。いえ、王妃なんてガラじゃないんですが、一緒になった亭主が国王だったもんでしょうがないんですよ」

と、笑いながら言う。よしあしは、

「中華屋のおばさんが王妃で、出前持ちが外務大臣だったか」と、つぶやいた。

中は、テーブルが五卓ほどある小体な店だった。隅の方に週刊誌や新聞が積み重ねてある。

「いえ、店は汚いですけど、これでも味は美味しいんですよ」

と、おばさん、いや王妃は奥のテーブルによしあしと家老を案内した。そこへ、調理場から、白衣を着て白い前掛けをした、でっぷりとした赤ら顔の中年男が出てきて、

「いやー、ようこそお出でなさいました。朕がダダチャ王国の国王、エダマメー三世です」と、よしあしに握手を求めた。後ろから、出てきた青年は、やはり白衣を着ているが、顔を見ると、先日、よしあしの城を訪れた王子であった。

「ただちゃー！」

「マメー！」

ダダチャ王国流の挨拶がすむと、テーブルの上に、ビール、餃子、野菜炒め、レバニ

ラ炒めなど次から次へと料理が運ばれてくる。

「わが国の主要産業は中華料理でしてな」

調理が一段落してテーブルに出てきた国王がビールを注ぎながら話をする。

「国土こそ小さいが、この料理の名声は南洋駅周辺一帯に鳴り渡っておりませぬ。近頃では、近所のオフィスの昼食用に中華弁当なども販売して好評を得ています。いや、昼時はさながら戦場ですな」

「それは、誠に祝着至極」

「わが国の人口は四人、国王である朕、王妃、王子、そして外務大臣です。もっとも、外務大臣はアルバイトで夜になると帰ってしまいますから、夜間人口は三人ですかな」

「金魚がいるわよ」

と、王妃。

「いや、あれは王立水族館だ」

料理をつまみ、ビールを飲んでいたよしあしが、

「王様、それがしに何か困りごとのご相談とか・・・」



それを聞くと上機嫌だった国王は、一転して暗い顔になり、

「はい、実は武勇の誉れ高い八幡太郎よしあし様にお助けいただきたいのです」

「よほどのことと見えますな」

「はい・・・申し上げた通り、わが国の主要産業は大変に栄えておりますが、その繁栄を破壊しかねないことが出来しまして」

「なんでしようかな」

「日暮れ時になると魔物がやってくるのです」

「魔物・・・？ ほう、その妖怪退治を拙者に頼みたいと・・・」

「はい。そろそろ夕方です。おそらくは、今日もやってくるでしょう」

「なるほど。それでは、それがし等は物陰に隠れて妖怪の様子を探りましょうか。それとも、さっさと斬り殺しましょうか」

「いえ、このまま、ここで呑んでいてください。そうすれば、自ずと様子が知れます。とっておきの老酒でもお出ししましょう」

「来た！」

店主、じゃなかった国王の目が光った。よしあしと家老の目も店のドアに吸い付けられる。

ぎつとドアの音がしてそこに姿を現したのは……よれよれのジャンパーを着て、分厚い眼鏡をかけた猫背の青年であった。

「あのく、魔物はどこに？」

「今のあれです」

「なんだ、ちよつと暗いが、ただの男じゃないですか」

「ご覧になっていればわかります」

「魔物」と呼ばれた男は、

「チャーハンひとつ」

と、かすれた声で注文した。

「はい、チャーハンいちく」

と、王妃が奥へ声をかける。奥からは「チャーハンいちく」と復唱する王子の声が聞こえた。やがてチャーハンが出来上がり、王妃によって男のテーブルに運ばれた。男は、ゆっくりと口をもぐもぐ動かしながら、チャーハンを食べ始めた。

「別に普通の客と変わりがないじゃないか」

と、よしあしが不満げに言うと、国王は、

「いえ、しばらくご覧になって下さい」

という。

とはいえ、なんの変哲もない食事風景をそうそう注目していられるわけではない。

なんとなく家老と雑談が始まり、酒は進み、老酒を一本明け、さらにビール、酎ハイ、日本酒と次々に呑み、上機嫌になってよしあしの国の民謡「八幡節」を一番から一五六番まで唄った辺りで、店の壁の時計を見ると、もう十二時を回っている。

「ああ、呑んだ呑んだ、酔った酔った、そろそろ、おいとまするかね」

と真つ赤な顔をしたよしあしが立ち上がろうとすると、国王が

「あれをご覧下さい」

と例の男の方を指さす。

「なんだ、まだ食っているのか」

しかも、チャーハンはまだ、三分の一ほどしか減っていない。彼が来店してから、六時間以上経つというのに、である。

「その食べ方をよおくご覧下さい」

言われて酔眼ながら男の口元を見てみると、

「げえっ！ チャーハンを一粒ずつ食べている！」

匙で普通にチャーハンを掬っているように見えるが、実は口元からカメレオンのような舌がぺろりと出て素早く一粒のチャーハンを口に入れていたのである。そして、その一粒を時間をかけて咀嚼してからゆっくりと嚥下するのである。

「あれで、夜明けまでかかってひと皿のチャーハンを食べ終わるのです。魔物と言えど客とあれば、邪険に帰れと言うわけにもいかず、客の食べ方に文句を言うわけにもいかず、もう、国中が寝不足の状態で、最近では注文を取り違えたり、塩と砂糖を間違えたりと、重大な被害が出て、ほとほと困っているのです・・・」

ダダチャ王国の重大事件を聞いたよしあしと家老、翌日、眠い目をこすりながら電車に乗ってどこかへ出掛けて行った。

帰ってきた時には、何やら紙包みを抱えて、

「国王陛下、魔物退治はお任せ下され」

その日暮れ時、また、あの男がやってきて、チャーハンをひとつ注文した。



「はいよ、いらっさい、チャーハンひとつあるね〜」

男は、なんだかぎよつとした感じで相手を見上げた。

「いつもの主人、ちよと風邪引いてるあるね。今日は私が代役あるよ」

そう言っている白衣の男はチョンマゲが付いている。よしあしである。

「チャーハンいち〜」と奥へ声をかけると「チャーハンいち〜」と復唱してきたのは家老である。

かんからかんから、と鉄杓子で中華鍋を叩くわざとらしい音がしばらく響いて、やがて、

「はい、お客さん、チャーハン、お待ちどうある」

と、よしあしが運んできた。

男は、しばらくじっと見ていたが、ペろつとカメレオンのような舌を出してきた。そして、いつものように、チャーハン一粒を拾おうとすると、なぜか皿ごとチャーハンが動いて、まるまる男の口に入ってしまった。

ひと皿のチャーハンと皿を喉に詰まらせて、男は苦しみだした。やがて、のたうち回り、恐ろしげな声を上げ始めた。

「大丈夫ですか」

王国の一同も出てきて心配そうに見ている。



男は、次第に姿を失いはじめ、どろどろの緑色の液体状に溶けてきた。

「これが、妖怪の正体だ」

「な、なんででしょう」

「おそらく・・・妖怪だろう」

どろどろの液体はしばらくうなり声を上げていたが、やがて粘菌か何かのように床を這ってドアの外に出て行った。

あとには、チャーハンが皿に載って出てきたままの姿で、すこしも乱れずに残っていた。

「蠟細工でござるよ」

と、よしあしが説明した。

「今日、東京は浅草の合羽橋へ行つて、食品の蠟細工の見本を買ってきたのでござる。これが領収書でござる」

「それにしても、何故、拙者にあの妖怪の退治を頼んだのでござるかな」

と、平和が戻ってきた店内で、よしあしは国王に聞いた。

「実は、よしあし様のご城下の駅ビルで開かれていた『わんこそば早食い大会』に出場されていたのを見たのです」

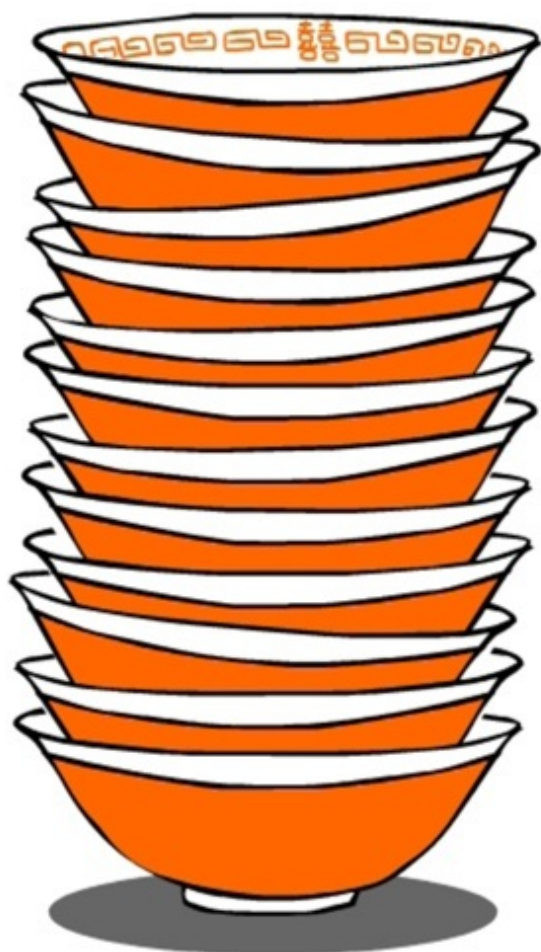
よしあしは、思い出した。わんこそば百杯をぶっちぎりの早さで食って優勝した時のことを。

「それで、王子を使節として派遣したところ、その駅弁を食べるのの早いこと早いこと、これなら、あの遅食い妖怪に立ち向かえるかもしれないと思ったのです」

「なるほど、さすが王様、お目が高い。ところで、このラーメン、お代わりをいただけますかな」

と、よしあしが十三杯目のラーメンを所望すると、「中華・ダダチャ王国」の店内に明るい笑い声が響き渡ったのであった。

(完)



八幡太郎よしあし風雲録 -ダダチャ国を救えの巻-

<http://p.booklog.jp/book/60742>

文豪堂

著者：中川善史

絵：金井哲夫

文豪堂書店ブログも見てね。

<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60742>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60742>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ